

【視察事項】

・南砺市の概要

南砺市は、富山県の南西端に位置し、北部は砺波市と小矢部市、東部は富山市、西部は石川県金沢市と白山市、南部は 1,000 メートルから 1,800 メートル級の山岳を経て岐阜県飛騨市や白川村と隣接している。平成16年に4町4村が合併し、市制を施行。面積は 668.64 平方キロメートルで、そのうち約八割が白山国立公園等を含む森林である。人口は 47,209 人(令和5年8月1日現在)で、杵築市の人口は南砺市の約57%で、面積も南砺市の約42%であり、規模としてはおよそ2倍程度と想定すると分かりやすい。老年人口割合 39.45%、年少人口割合は 9.63%となっており、杵築と同じく少子・高齢化が進行している。

・住民自治について

平成21年に協働のまちづくり推進の方針を決定し、23年に、地域の自由裁量で地域の実情に応じた活動を、地域住民の合意に基づいて行うことを可能にする「地域づくり交付金」制度を制定。翌年、南砺市まちづくり基本条例制定、協働のまちづくり推進会議が設置される。27年、小規模多機能自治に学ぶ「住民自治のまちづくり教室」開催。30年には協働のまちづくり推進会議から中間支援組織の役割について提言があり、31年、全31地区のうち28地区が地域づくり協議会を設立。人的支援となる『なんと未来支援センター』が設立される。令和2年には残りの3地区が地域づくり協議会を設立し、資金的な支援となる『南砺幸せ未来基金』(市民ファンド)が設立。令和3年、なんと未来支援センターを南砺市中間支援組織として認定、4年には南砺幸せ未来基金を南砺市中間支援組織として認定。南砺ひととみらい協働組合が設立。

人口減少が続くなか、集落(支えあいの基盤)の弱体化等を社会課題と捉え、自分ごと化させることで住民自治を再構築していている。川北英人さんを講師に迎え、それぞれの地域の組織のスリム化と無駄の排除を重要視する考えを市と地域住民が学んでいる。

・対応策として

①行事、各事業の見直し

→行事の統合、会議の回数を減らす、福祉事業などをコミュニティビジネス化

②組織構成の見直し

→自主組織の部会、団体は、毎年見直し(組織の数だけ役がある！)

③無駄な会議を廃止、会議時間の短縮

→時間を最大限に活用する工夫、心掛け(目的・趣旨を明確に！同日開催するなど)が挙げられる。イベントを併せると人が集まりやすい。

小規模多機能自治の手法による地域づくり協議会の役割とは、地域の課題を顕在化させ、ニーズに応じた事業を行い、持続可能な地域づくりを目指すことが示されている。

地域課題を解決するため、組織の垣根を取り払った「地域づくり協議会」を設立し、コロナ禍の中

では、Zoom を活用して、各地区取り組み発表会や地域円卓会議を開いている(オンラインシステムの導入)。

ニーズに応じた部会を設置し地域住民の参加によって必要な事業を実施。課題解決に向けた事業として、地域づくり協議会が主体となって通所型サービスBの開所数が増加しているほか、空き家を改修し、地元の児童や生徒の自習やイベントなどに利用できるブックカフェをオープン、お年寄りから若い人までが集い、地域のにぎわいを生み出す拠点にしている例もある。

令和5年、住民自治推進交付金は、約2億7千万円。

内容としては、

- ①地域づくり費 安心安全、環境保全、地域活力の創出に資する事業(自由裁量)
- ②地域事業推進費 地域課題解決に向けた自主的な活動の推進ができると市長が認めた事業(主には元々の公民館で行っていた活動)
- ③生涯学習推進費 社会教育及び生涯学習の推進に資する事業
- ④社会福祉推進費 福祉事業や敬老会等に係る経費で地区社協が行っていたもの
- ⑤推進人件費 センター管理者や地域指導員、学習や活動リーダーに係る経費、労働保険及び社会保険に係る経費
- ⑥施設維持管理費 光熱水費や修繕等維持管理費

様々な課題がある中、取り組みに差が目立つようになり、既に取り組まれている事例を提示(メニュ化)して取り組みやすくしている。積極的にいろんなことに取り組もうとする地域づくり協議会への支援を充実させることを目的に、地域事業推進費の内容を拡充し、交付額を加算する仕組みに変更。また、人口規模に拘らず、一定の経費配分を確保するため、地域づくり費の均等割り・世帯割・人口割の配分を変更し、さらに今後の人材確保に向けて、事務局員の人件費を引き上げている。

推進人件費として、交流センター管理者1人分、月額20万円、地域指導員1人分月額15.5万円。元会長(区長)は理事が殆どで皆さん男性だが、実際に動かしているのは部会。そうすると女性が入ってきやすく、実際に女性が多く活動している。南砺市は、ジェンダーギャップ解消を企業にも投げかけ、研修会も開かれている。

地区によっては地縁団体登録をして、里芋を育てて販売をし、収益をあげている所もある。今後、農協の売店の経営をする地区も出てきそうとのこと。

・南砺未来支援センターについて

地域づくり協議会と市の中間に位置し、バックアップ・コーディネート、非資金的援助を行っている。南砺で暮らしません課から委託費を支払って人件費等を経費としている。

○地域づくりを自分ごととし、地域内外の支えあい課題を解決しようとする取り組みを支えるため、なんと未来基金と、南砺未来支援センターが中間支援組織となって、人材育成や課題解決へのアドバイス、ソーシャルビジネス化の研修といった伴走型支援活動や資金面でサポートしている。行政が上手く顕在化できなかったことも、その後行政に繋ぐ良い連携が出来ている。他、まちづくり人材や企業・大学等とも連携、参加、支援を行っている。

・なんと未来基金について

2017年に基金設立発起人が設置されてから、寄付を集め、2019年には一般社団法人化。基金設立寄付の総額は3,617,300円で200人強の方が寄付をしてくれた。その後公益財団法人を設立し、2020年より本格スタート。「頑張る人・地域応援事業」や「休眠預金等活用」2020年度資金分配団体を探している。全国的に見ても非常に珍しいコミュニティ財団で、南砺市内を活動範囲とし、課題に寄り添った地域のための組織である。行政だけに頼らない新しい住民自治のかたち、市民立の組織である。

テーマ

- 1)暮らしを支える事業
- 2)森里川海のつながりを保全する事業
- 3)再生可能エネルギーを支える事業
- 4)地域の歴史・土徳文化を支える事業 となっている

取り組み

- ・地域の課題解決に向けた事業助成(資金的支援・非資金的支援)
非資金的支援というのは、何のためにというのを明らかにして方向性を立ててあげる事
- ・寄付文化醸成のための普及啓発
ニュースレターの発行、HP や SNS を利用した広報活動

助成事例としては、農産物のブランド化の取り組み、要支援者宅道の除雪、子どもと子育て世代への情報発信、外国人コミュニティへのコロナ対策支援、シニアカー自動運転まちなか実証実験、伝統文化を次世代への伝承、お困りごとなんでも相談窓口の設置等

休眠預金事業の助成は、引きこもりや精神障害があり孤立状態の人に社会参加の環境を創る、障がい者と引きこもりの方などの雇用の場の創出、孤立しがちな子育てママのコミュニティの構築、中山間の地域コミュニティを維持し、新規就農希望者を地域へ繋ぐ、生きづらさを抱える人も幸せになれる地域の居場所づくり、まちなかりノベーション(古民家を改装し、夜間働く保護者向けの夜間保育事業の開設、一人暮らし老人と移住者、双方の孤立を防ぎ、次世代へ引き継ぐ移住応援団等

寄付した方にとっては、商品やサービス、住みよい環境といった形で循環されるものになっている。

・エコビレッジ構想策定(2013)

基本方針 便利な生活に懐かしい生活をミックスし「南砺型ライフスタイル」へ

1. 再生可能エネルギーによる地域内エネルギーの自給と技術の促進
2. 農林業の再生と商工観光業との連携
3. 健康医療・介護福祉の充実と連携

4. 未来を創る教育・次世代の育成
5. ソーシャルビジネスやコミュニティビジネスによるエコビレッジ事業の推進
6. 森や里山の活用と懐かしい暮らし方の再評価による集落の活性化

再生可能エネルギー(太陽光発電、小水力発電、木質ボイラー、木質ストーブの導入等)木質エネルギーの利活用、森林。木材利活用、循環型農業の推進(農薬や化学肥料、除草剤をなるべく使わず環境への負荷をできる限り低減しての農作物の生産、人材育成)、地域エネルギー事業(木質ペレット工場設立・森林環境譲与税活用、地域新電力設立)、合掌家屋「かずら」再生、高校生のエコビレッジ部活動、南砺暮らしの提案等

SDGs未来都市なんと として2030年までに実現したいこととして総合計画を作っているが、その将来像は「誰ひとり取り残さない 誰もが笑顔で暮らし続けられるまちへ」。目指すべきまちの姿の目標として、将来を担う世代の育み、幸福度の向上、暮らしやすさの実感向上、シビックプライドの醸成をあげている。

・南砺で暮らしません課による婚活支援

南砺市では、「あなたと私を結ぶ赤い糸プロジェクト AIP48」と題して、独身の方の結婚活動を応援している。

概ね25歳以上から50歳までの独身男女に婚活倶楽部なんとに登録してもらう。婚活応援団「なんとおせっ会」が、独身者へのお世話焼きとしての婚活支援を行っている。加入促進や出会いのイベント情報の紹介、写真お見合い会等。事務局は、南砺で暮らしません課 女性活躍・婚活支援係と、(一社)なんと未来支援センター 婚活支援職員。コンセプトは「頑張る人を応援する」。

現在のAIPの会員は男性307人、女性197人の計504人。おせっかいさんは男性51人、女性90人の計141人。

婚活テレビ番組が来た際に、良い取り組みだったので、それを真似て南砺市独自に2011年から毎年「モテモテなんとお見合い大作戦」を開いている。市内在住の成婚カップルは174組(会員成婚卒業は270組)。2011年4月から2023年10月までのAIPベビーは136人誕生している。

【所感】

南砺市は、宝島社の「田舎暮らしの本」で行っている“住みたい田舎”ランキング、北陸エリア8年連続一位に輝いている。それは、雄大な自然や伝統ある歴史、世界遺産があるということもあるだろうが、移住者を積極的に受け入れてサポートする体制が整っているというのが大きいと感じた。過疎高齢化の波はどここの市町村も受けていることではあるが、南砺市は早い段階から危機感を持って、集落(支え合い)を市と市民が手を携えて取り組んでいる。過疎高齢化に太刀打ちしていくには、外から移住者を呼びこむこと、既婚率を上げ、出産・子育てを応援すること、定住促進を図ることが重要である。特に南砺市に於いて移住者の仕事をどう見つけるかという点が大きな課題になるが、特筆すべきは、エコビレッジ構想にあるように地域資源を活かした持続可能なまちづくりを目指しているところだろう。移住者が目指している理想と合致することばかりである。それは、農林業の担い手不足解消にも繋がる。また、季節労働を組み合わせ、とりあえず引っ越してくれば仕事が見つかる、という安心感を与えている点もあるだろう。

そういった人たちと、元々住んでいた人を円滑に結ぶのが、市であり、なんと未来支援センターであり、未来基金であり、高い意識をもった支援センターに集う住民である。

南砺市の住民自治に対する予算規模は、杵築市に比べ遥かに多く、同じことは出来ないと感じるかもしれないが、住民自治に対する意気込みというのが大きければ、どうお金を使うのかというものも自ずと変わってくるだろう。人は誰かの役に立っていると実感できた時に喜びを感じるものだが、南砺市では、住民自らが住民自治の活動やおせっ会の活動をし、ここで生きているという実感を、喜びと共に味わっているのではないだろうか。

杵築市に於いても、安心して暮らしていける場所となるよう、はるか先を歩いている南砺市の真似出来るところは真似て、住民がこの先も安心してここで暮らしていけるという希望が持てるよう、過疎高齢化に立ち向かっていきたい。また、大きな課題である農林水産業の後継者不足と移住者との繋ぐ役割が、住民自らの手で行われるよう支援できたらと強く感じた。